第 485 回教化高等講習会　「仏教における『苦』について 」令和 3/1/29/金/10:00~12:15

佛教大学　本庄良文

【概要】（告知済）

仏教は、輪廻を苦ととらえ、その原因を業・煩悩に求め、煩悩を滅ぼすことで輪廻の苦の超越を目指す宗教です。第一部では、原始仏教の基本的な世界観・人生観である「諸行無常」「一切皆苦」「諸法無我」「涅槃寂静」という「四法印」、四聖諦、縁起などの主要な教義を振返ります。第二部では、原始仏典の中の釈尊の過去世の物語（本生話）等に見られる「他者の苦を除く」菩薩の姿が、大乗菩薩の利他行に連なることを確認します。

第一部　「苦」についての基礎的な教え

【Ⅰ】縁起：釈尊の覚りの内容（『倶舎論』第三章「世間品」）人生観・世界観

煩悩　⇒　業　　⇒　　苦（輪廻）

煩悩の断⇒業の効力の消滅⇒苦（輪廻）の消滅

輪廻は「無始」であり、修行しない限り「無終」

【Ⅱ】四聖諦：苦諦＝四苦八苦

苦集諦＝渇愛＝再生を齎し、あれこれの対象を喜ぶ渇愛（煩悩と業）

苦滅諦＝苦の止滅＝涅槃＝覚り（菩提）

苦滅道諦＝八支聖道（正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定）

＝戒・定・慧の三学

聖諦＝聖者にとっての真実（『雑阿含経』第 16 巻, 417 経）

聖者は苦を苦と見、楽を楽と見るが、凡夫は顛倒して見るから（趣意）

（『雑阿含経』第 13 巻, 308 経）

【Ⅲ】仏教の旗印（四法印）

・仏教独特の思想は「諸法無我」⇒大乗の空思想

・他の三つは他のインド思想に類似の考えがある

（１）　諸行無常　諸行：因縁によって生じ、瞬時に滅びる存在＝有為法＝五蘊（広義の行）

有為法＝因縁によって「造作」された（サンスクリタ）存在＝五蘊

五蘊（５スカンダ）蘊＝内外・過去未来現在・粗細などの集積

(1) 色蘊：肉体・物質（ルーパ）（広義の色）（狭義の色は色・形）

風・直射日光・寒冷・虻・蚊・石・棒・刀などによって

傷めつけられる（ループヤテー）から「ルーパ」である

（『雑阿含経』第 2 巻, 46 経）

(2)受蘊：苦・楽・不苦不楽（捨）

(3)想蘊：「男だ」「女だ」「敵だ」「味方だ」等の、言葉に直結する想念

(4)行蘊：動機（狭義の行）

(5) 識蘊：識＝心＝意（眼・耳・鼻・舌・身・意の認識）

（２）諸法無我　我々の身心すべてが、修行なしにはコントロール不能
五蘊は無常ゆえに苦、苦ゆえに無我（阿含経典の諸処）
我＝自我（釈尊当時の新興思想＝自我説と輪廻説）
インド哲学での自我＝常（永遠）・一（単一）・主（主体）・宰（制御）
常・一・主・宰なる自我などこの世のどこにもない
（ただし、言語表現として「私」は存在する）
（３）一切皆苦　四聖諦のうちの「苦諦」＝四苦八苦
（４）涅槃寂静　煩悩の滅＝輪廻の滅＝真の平安　　四聖諦のうちの「滅諦」

【Ⅳ】「一切皆苦」の詳細
（１）四苦　①生（誕生）は苦なり。②老…③病…④死は苦なり。
（２）八苦　⑤愛する者との別離は苦なり（愛別離苦・あいべつりく）
⑥憎む者との遭遇は苦なり（怨憎会苦・おんぞうえく）
⑦求めて得ざるは苦なり（求不得苦・ぐふとくく）
⑧総じて五取蘊は苦なり（五盛陰苦・ごじょうおんく・「取」は煩悩の意。
煩悩に支配される我が身心は総じて苦である）＝総括
（３）第一苦から第七苦までは「各論」、第八苦は「総論」
（４）補足①：「生苦」について「生きることは苦だ」という説明を見かけるが、誤り。
「誕生」が「苦」であることの説明は二つ。
第一は、誕生自体は、人間の場合、母胎に着床することなので苦ではないが、その後の人生の苦の原因となるので「苦」と説かれたとの解釈（武内義範説、梶山雄一より）、
第二は、本来、胎児が母親の産道を通ることを意味したとの解釈（原実「生苦」参照）。
（５）補足②：「老」について。阿含経典（『雑阿含経』巻 12, 298 経）によると、「1. 毛が抜けること、2. 白髪となること、3. 皺が増えること、4. 朽ちしおれること、5. 屈むこと、6. 曲った梁のように曲がること、7. 喉がぜいぜいいうこと、8. 斑点（老人斑）が体を覆うこと、9. 杖に縋ること、10. 身体が前に傾くこと、11, 12 感覚器官が衰え、衰退すること、13. 寿命が衰えること、14. 老いさらばえること、15. 鈍くなること、16. 痴呆、17. 減退、18. 衰弱、これが老と呼ばれる」とある。
（６）補足③：佛教大学仏教学科編『仏教入門―釈尊と法然上人の教え』学術図書出版社、pp. 30~31
「世間の人々は、自分が**老**い、**病**み、**死**ぬのに他人が老い、病み、死ぬのを見て嫌悪しているが、それは私には相応しくない」と考えたとき、若さ、健康、生存の「憍」は消えうせた。(『増支部』)
憍(mada) 酔い、陶酔　　酔っている人が「酔っていない！」と言い張るのに似ている（本庄）
「慢」は、他人と比較しての思い上がり、「憍」は他人と比較しない思いあがり
（７）補足④：「ALS は業病」という石原慎太郎元東京都知事の発言（後に謝罪）について
①釈尊は以下の三つの説をすべて批判
(1) 運命論　人間が受ける苦楽はすべて前世の業が原因である
(2) 一因論　人間が受ける苦楽はすべて全能の神が原因である
(3) 無因論　人間が受ける苦楽はすべて偶然であって原因がない
②病気や苦痛の原因の二種

⑴ 前世の悪業が原因のもの（少ない）

⑵ 胆汁・粘液・風・季節の変化など（悪業の結果ではない）

③特定の業とその結果との関係はブッダにしかわからない

「ALS は過去の悪業の報いだ」というのは、自分がブッダであるかのように言い、

ALS 患者を不快にさせる点で、二重の誤りを犯している

『業を見すえて』浄土宗、2001, pp. 22~25.

（８）補足⑤：「一切皆苦」のような「悲観的」な人生観が何の役に立つか

⑴苦しい時に「自分だけではない」と、気持ちが和らぐ

⑵「悲観的」な人生観をもっていると、「楽観的」な人生観をもっているより、危機において精神的に安定する（落差の差）

⑶快を味わうときより深く喜べる

（９）補足⑥「一切皆苦」と、「楽もあれば苦もあり、その中間（不苦不楽）もある」との会通

第二部　『往生要集』をヒントに―利他の楽

（１）　浄土十楽

①　聖衆来迎楽　②蓮華初開楽　③身相神通楽　④五妙境界楽　⑤快楽無退楽　⑥引接結縁楽

⑦聖衆倶会楽　⑧見仏聞法楽　⑨随心供仏楽　⑩増進仏道楽

（２）　引接結縁（縁のある人を迎える）＝他者の救済＝利他行＝楽

通常、「楽」とは、他者から、あるいは外界から恵まれる快を言うと思われるが、『往生要集』第二章では、利他が「楽」と捉えられている。（参考：最近の心理学的な研究：寄付を行うと幸福感が得られるとのこと。）

（３）　利他行の源流：本生話（ジャータカ）の菩薩行―鹿本生＝「菩薩代受苦」の源流か？

（４）　念仏を誹謗する逆縁の人と結縁して互いに極楽往生を目指そうとする怨親平等思想も、利他を楽とする思想の現れか